

前武蔵工業大学環境情報学部<sup>\*</sup>の2年生を対象とした「環境とデザイン」という科目があった。住まいやまちづくりと環境とのかわりを様々な角度から紐解く座学中心の講義である。講義は毎年後期に配分されたが、その早い時期に必ず都筑民家園<sup>\*</sup>に向かい、まる1日をかけて講義とスケッチの授業を実施する。私は都合10年間担当した。

講義ではかつて庄屋だった旧長沢家住宅<sup>\*1</sup>の移築・保存のプロセスを学び、谷崎潤一郎<sup>\*2</sup>の「陰翳礼讃<sup>\*3</sup>」の文書購読を行うことを常とした。背後に聳え立つ団地のような集合住宅に住み慣れ、あるいは見慣れた世代だが、



写真90-1 都筑民家園旧長沢家住宅



写真90-2 スケッチに没頭する学生



写真90-3 作品 (柴田舞美)

静かに光と影の空間を体験できることのすばらしさに感動する学生が多い。前庭に反射した陽光が軒に跳ね返り畳を照らす。その反射光がさらに土壁や天井に届く。障子を介した淡く白い光がやわらかく部屋の隅々に拡散する。陰翳礼讃の世界はこうして身体的体験として学生一人ひとりの体に染み渡っていく。

その過程で、彼等のDNAは活性化され、居住体験の有無に拘わらず、「懐かしさ」の感覚が頭をもたげる。そして、その活き活きとした感覚をスケッチブックに留めるべく、どんな部位、どんな場所でも鉛筆を使って描いてもらう。彼等は絵を描くことを特に訓練された学生ではない。しかし、自らの肉体を通して眼前の空間を描くことによって、風を感じ、光と影に包まれながら、数時間をそこで過ごすことになる。その結果、彼らのDNAは完全に呼び覚まされるのである。

そこを訪れ、見事に手入れの行き届いた庭や周囲の竹林と一体となる。こうして私たちの日常から失われつつある美しい住まいの佇まいに身を置き、一時を過ごす者に心地よい時間が流れる。従って、そこで表現される空間や部位の数々には、驚くほど思いがこもっている。そのことにいつも感心させられた。毎年2百人を超える学生が履修したから、かれこれ2千枚近くのスケッチが描かれたことになる。それは私にとっても貴重な財産なのだ。



写真90-4 長沢家住宅での講義風景

\*1 横浜市歴史博物館都筑民家園・江戸時代の民家「旧長沢家住宅」を中心とする区域。市民ボランティアが運営

\*2 谷崎潤一郎 (1886~1965) 『近代日本文学を代表する小説家の一人』

\*3 陰翳礼讃、「経済往来」1933年12月号、9年1月号に掲載された谷崎の随筆